

れが本当の生き地獄かと思う。一年間くらいで奥地の収容所へと移動を繰り返す。

二十二年後半ごろより食糧事情も若干好転、そのころより民主運動始まる。若い元気な者が盛り上がり、年配の者は沈みがちの状態が続く。そのころ内地の家族より便りが届く。いつの日にか帰れるぞと希望が湧く。

帰還並びに帰国後の生活

昭和二十三年八月収容所発、一路ナホトカへ。車中、行きは地獄、帰りは極楽の心境。ナホトカ一週間の滞在にて乗船。これで生還確実と感無量。船中、民主運動の激烈を極めるも無事九月二十五日、舞鶴上陸。

九月二十九日、懐かしの生家にたどり着く。

復員以来五十年近い生活の中で、幸い健康に恵まれ、難事に出会えばシベリアを偲んで奮起し、東満の山野に、またシベリアの凍土に寂しく眠る戦友のご冥福を念じて、今日も生きている。

抑留の思い出

千葉県 内山留吉

本籍地は、千葉市千葉寺町。習志野戦車学校第三連隊に昭和十六年一月入隊。

昭和十六年十一月、満州公主嶺戦車学校第五八三部隊に転属。十八年、部隊全員四平街へ移動。

昭和二十年八月終戦。武装解除。

二十年十一月、ソ連に連行され黒龍江より船で出発、ウラジオストックに入港上陸、貨物列車にて約十五日間の旅でイルクーツクに到着。既にハルビンより先着していた機甲部隊と合流し、約二十人一緒に収容された。

伐採、煉瓦工場で約一年間労働し、第一〇収容所に移動。収容人員一千人ぐらい。

作業は製材工場、運動場整地等。この作業場で約三年間労働した。

体はその間健康だった。作業はノルマが大変で病人が続出し、特に伐採現場では切り倒した大木の枝の下敷きになり戦友三名死亡、尊い命を落としたことは本当に残念だった。また収容所で私の隣にいた人も、五人ぐらい栄養失調で亡くなったと記憶している。

食事も、ノルマが上がらずパン百グラム、粟ガユ少々で、体力も限界に達し、苦しい毎日だった。特に煉瓦工場の作業は厳しくつらい思いをし、在ソ中一番嫌な思い出になる最も苦しい毎日だった。

朝七時から夕方五時までの三交代で、雨が降っても冬の酷寒時でも一日の休みもなく、本当に奴隷のようで、早く解放されて日本に帰りたいという気持ちで悲しく泣きながら作業をした。

ソ連軍は、「今年は皆さん、家族の待つ日本に帰れるから仕事を頑張れ、ノルマを上げろ」と我々を騙し続けた。我々は、もうソ連軍の言うことは嘘のかたまりだからと毎日自分に言い聞かせて、健康で適当に労働し、日本に帰る日まで頑張ろう、この酷寒のシベリアの地で死んでたまるかと悲壮な決心をした。

また、私の衣類を民間人のパンと交換して命をつないだりして保身に専念した。そして、ソ連の政治学校に三カ月行ったりしたのも、帰国するためのやむを得ない対応だった（勿論、政治学校はソ連側の命令によるものであったが）。学校から帰り再び作業場に行き、ノルマ、ノルマに精を出す苦しい日々が続いた。

そして、ついに帰国の知らせがあり、出発準備するも半信半疑で、また別のラーゲルに移動かと思えてあきらめ、指示のまま行動しイルクーツク駅の引込線に集合、全員が貨物列車に乗り込み一路東へ進む。約十日間の旅でナホトカ駅に到着、今度こそ本当にあの船に乗り日本に帰れるのだと思えば嬉しくて、感激の涙を流した。

ナホトカに約十日間船待ちのため滞在、ようやく引揚船「信洋丸」に乗船（昭和二十四年六月）、懐かしい日本の港、舞鶴港に入港、上陸。宿舎に入り、久しぶりの日本料理で友と語り合いながら一夜を過ごし、約一週間滞在した。その間、検査、衣類交換など、また出身地まで帰る旅費支給等諸用を終わり、故郷に向

かった。

思えば、長い年月をソ連軍は不法にも抑留という手段で我々罪のない人を捕え、不当な労役をしいた。

シベリアの炭鉱労働

長野県 春日直喜

昭和十九年一月十日、現役兵として高崎の歩兵連隊に入隊。数日後、北支派遣軍となり、釜山を経て北京に行き、ここで本科教育を受け、検閲終了後、大隊無線に配属となり四カ月間の通信教育を受ける。終了後、関東軍に編入され、黒龍江に近いクイロという所に駐屯し、ここに陣地を造り、ソ連軍と交戦すべくタコツボを掘り爆薬を準備し交戦を待つ。我々通信隊は通信のほか、ソ連軍の情報傍受等の任につく。

その後、戦局急変により奉天に移動し奉天守護の任務につく。着任後間もなく終戦となる。

やがてソ連軍が進駐し、武装を解除される。自動小

銃を持ったソ連兵の監視の中で空白の日々が二カ月近く続く。十月十日、ソ連軍より指令が出て列車に乗る。小さな貨車に二段に詰められ荷物のようだ。日本へ帰るんだ、我慢しなければと十日余り、突然「日本海が見えたぞ」の声、それは意外にもバイカル湖だった。バイカル湖を出てイルクーツクに着く。全員整列し服装検査、余分な物は一切その場に置き、旧ドイツ兵の捕虜収容所だったと言う半地下式のバラックに収容される。

間もなく炭鉱の重労働に駆り出される。作業は、ハッパで砕いた石炭を悪い物を除いてベルトコンベアーによりトロッコに積み込む作業である。一昼夜三交代の八時間労働。零下四〇度を超す寒さの中、鼻、手足の指先が白く凍る。そのままおいたら大変なことになる。お互いに擦り合いながら頑張る。作業終了後帰るため整列したところ、一人足りない。皆で捜したところ、後方に倒れているのがわかる。早速抱き起こしてみると既に息絶えて冷たくなり、手足は凍っているといった悲惨なこともあった。食糧は少なく、食事らしい食